

初日となった2月6日午後1時には、北海道環境財団の辻井達一理事長をはじめ事業関係者が見守る中、農地跡地に最初の手が入れられました。事業に際しては、自然への影響を最小限にとどめるために、資材運搬用の仮設道路に雪を積み上げて造るアイスブリッジを採用。全て人力で総延長1.5kmのアイスブリッジづくりの作業が進められました。



アイスブリッジの上を走行する、小型履帯機

農地跡地の表土はぎとり作業を実施

この事業は、事業対象地260haで実施された環境調査結果に基づいて行われたもので、農地跡地に堆積した有機土層などを試験的にはぎとり(2,400㎡)、地下水位に近づけることにより、ヨシやスゲなどの湿地植物の回復を促そうというもの。このほか、人為的影響により増大したと考えられるハ

ノキを一部試験的に伐採(1,250㎡)し、湿原への影響をモニタリングする調査も実施。

広里地域では、引き続き各種調査を実施し、それらのデータの分析を行いながら今後の自然再生事業に生かし、最終的には農地造成以前の1960年代の湿原の姿に戻すことを目標としています。🌱

「環境づくりの一端を施工を通じて担いたい。」

全国的にも注目されている事業の一環として、広里地域自然再生事業を請け負うことになりました。本事業が、地域と自然が共生できる環境づくりの一端を担っていることを十分に意識し施工したいと思います。

試験区においては、群生しているミズゴケを傷つけないよう、人力による丁寧なハンノキ伐採、その他、湿原植生に負荷を与えないよう、積雪を集め搬出路(アイス

ブリッジ)を確保しております。

これからも自然と共生していくために、60年代の湿原に再生できるように参加し続けたいと思います。



広里地域の施工を担当する株式会社 佐々木建設 代表取締役社長 佐々木昇一さん

塘路・茅沼地域 水質調査を実施して再生手法の検討へ

水質浄化実証試験、生活雑排水の現状調査を開始

標茶高校で温泉排水の調査へ

標茶町に位置する茅沼地域は、温泉排水が湿原や湖を通過して釧路川に流入しています。この状況を踏まえ、湿原内に生育している植物を利用して、温泉排水の水質浄化を試みる実証試験が、地元ベンチャー企業のカムイエンジニアリングと標茶高校の協力により、平成14年12月から始まりました。

この試験では、植物の種類による浄化能力・適合性、さらに浄化に要する期間などを把握し、水環境の再生手法の検討に役立っています。

調査は、地元標茶高校に設置しているハウス内で、ヨシ、エンコウソウなど4種類の実験用植物を使って温泉排水の浄化試験を行い、定期的に7項目の水質調査を実施しています。

また、塘路地域における生活雑排

水についても、7箇所排水を採取して水質調査を実施しています。

これらの水質浄化実証試験や生活雑排水の調査結果を基に、塘路・茅沼地域での水環境の再生に向けた具体的な事業計画を検討する考えです。🌱



水質浄化実証試験に使用する水槽に水が漏れないようにビニールを張っているところ

「標茶高校も実験を通して調査に参加しています。」

釧路湿原植物の水質浄化への効果を調査するという事で共同実験をはじめ、それに携わる一人の人間として責任を持って調査・研究をしていきたいです。家畜糞尿や生活排水の問題は私たちの地域にとって大きな問題なので、この結果をもとに湿原の実態をもっともっと学習し、道東の環境や産業の発展に役立てていきたいです。



標茶高校1年 齊藤 卓さん(写真左)
標茶高校2年 佐藤 栄さん(写真右)